

膝前十字靭帯再建術後患者に対する再損傷予防プログラムの効果 —運動機能面の改善効果について—

○北口 拓也¹⁾, 佐藤 のぞみ¹⁾, 竹下 真弥¹⁾, 金本 隆司¹⁾, 平林 伸治¹⁾,
田中 美成²⁾, 北 圭介²⁾, 天野 大²⁾, 堀部 秀二³⁾

¹⁾ 大阪労災病院 中央リハビリテーション部

²⁾ 大阪労災病院 スポーツ整形外科

³⁾ 大阪府立大学 総合リハビリテーション学研究所

【目的】

当院では ACL 再建術後患者を対象に、受傷機転として頻度の高い着地、ストップ、カッティング等スポーツ関連の動作指導を中心とした再損傷予防プログラムを実施している。今回、本プログラムが運動機能面に与える効果について検証を行ったので報告する。

【方法】

対象は当院にてスポーツ復帰目的に ACL 再建術を施行した 26 名とし、外来にて再損傷予防プログラムを実施した予防 (P) 群 17 名 (17.8±3.5 歳, 女性 10 名, 男性 7 名) と実施しなかったコントロール (C) 群 9 名 (19.3±4.5 歳, 女性 4 名, 男性 5 名) に分類した。測定項目は術前、術後 6 カ月時の IKDC subjective score (IKDC), 等速性膝筋力, 術後 6 カ月時の Single Leg Hop Test (SLH), Star Excursion Balance Test (SEB) とし両群の比較を行った。

【結果】

術前機能は全ての項目において両群間に差はなかった。術後 6 ヶ月の比較では膝筋力は患健比、体重比共に両群間に差を認めなかったが、IKDC (P 群 84.7±6.1 点, C 群 77.2±10.1 点; $p<0.05$), SLH 患健比 (91.9±7.2%, 78.7±15.8%; $p<0.05$), SEB の後方リーチ身長比 (48.1±3.3%, 43.8±3.2%; $p<0.05$), 後外側リーチ身長比 (46.2±3.5%, 41.2±4.3%; $p<0.05$) は P 群が C 群に比べ有意に改善していた。

【考察】

当院の ACL 再損傷予防プログラムは運動機能面の回復に有効であったが、この効果が再損傷率の低下につながるかどうかの検証が今後の課題である。